

教 仁 名 聞

第 110 号
(発行日)

2019 年 11 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 6638113 西宮市
甲子園口 2 丁目 7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

いのち 命ながらえた不思議

江戸時代末期に香樹院徳龍師(一七七二〜一八五八。八十七歳寂)という高德の名師がおられました。師は大谷派のご講師で厚い信心があり、徳行にも勝れ、「香樹院の前に香樹院なし、香樹院の後に香樹院なし」と言われた名師でした。師の逸話にこういうお話があります。一蓮院秀存師が香樹院師を往生される一ヶ月ほど前に訪ねられた時のお話です。

十二月二十七日、秀存師、香樹院師の病床をたづねられたらば。

仰せに。誰れにも人に尋ねずに、唯だまって念仏を申しなされ。

存曰く。左様ならば、ただ御不思議におまかせ申して、念仏を称える計りで御座りますか。

師曰く。不思議と云えば、今まで命ながらえたのがは

や不思議じゃ程に。

(「香樹院語録」より)

八十七歳の香樹院師が重篤の病床で語られた「今まで命ながらえたのがはや不思議じゃほどに」というお言葉は大事なことをお伝えくださっていると思います。

というのはこの言葉はアマダ仏の働きを非常に身近なところで感じておられる言葉だからです。

ちよつと聞くと特別な言葉ではないように思いますが、香樹院師が一生かけて求め聞いてきたアマダ仏のお働きを、私たちの日常から離れたところに感じておられるのではなく、今この事実の上に味わっておられるからです。

アマダ仏のお助けとか救いは南無阿弥陀仏の名号として私たちに喚びかけて下さっていること、その喚び

かけは一声の南無阿弥陀仏において、「汝を助ける」と聞かせていたのだくのを信心ということとは真宗教義の基本です。

ただその助けたまい、喚びかけたもうアマダ仏の力、その働きを存在の事実の上に味わつての表現は、伝統的な真宗の教えの上では余り語られてきませんでした。

以前「アマダ仏の存在を私は信じられません」と言われる方がありました。この方は仏教に触れてほどなき方でした。こういうお方にどのようアマダ仏のましますことを伝えるかをそれ以後考えさせられたも

のです。このことは現代における一つの課題であると思えます。

現代は「神も仏も信じない、どこにそんなお方がいるのか」などと言う人、言わなくても心の中で思っている人は少なくないと思います。

ことにたくさん知識があり、何事にも気を配つて精一杯生きてきたと思う人は「自分には確かな判断力がある」と思い、「自分の力で生きてきた」という自負心が強く、容易に「仏に生かされてきた」などとは感じません。

ところがここで香樹院師が「今までこうして生きてきたのがすでに不思議である」と仰せられている。そ

《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (日) 午後二時始

講師 山口県防府市

宮田秀成先生

*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

これは、今ここまで生きてきた不思議さ、生かされてきた不思議さ、そこに自分を生かしてきた働き、それは私を助けてくださったというアマダ仏のほかにないこと。助けたもうアマダ仏と今ここまで生かしてくださったという働きとは別なものではないと受け取っておられると伺います。

ここに真宗の信心が深く味わっておられるのを感じます。アマダ仏の撰取不捨のお働きを極めて身近な存在の事実の上に感じておられるのです。

ですから現代人にアマダ仏のましますことを伝えようとするとすれば、「今あなたがずっと今ここまで生きてきたのは大きなお力で生かされてきたからでしょう。寝てるときも起きてるときも、健康なときも病気のときも、失敗したときも成功したときも、誉められたときも誹られたときも、いつでも生かしてください、今ここにまで運んでくださっている力、それは我ならざる大きないのちの働

きです。それを寿命無量と云いアマダ仏といわれるのです」と申し上げることができましょう。

このはかりなきいのちであるアマダ仏の働きを香樹院師は「今まで生きながらえた不思議」と感謝をもって話されたのであります。

これに対して「けれども、それは大自然の力であってアマダ仏とは云えないでしょう」と言われる方がおられるでしょう。

しかし大自然の働きは、寿命無量（アマダ仏）のいのちを対象化し客観的に捉えた場合であって、その源というか、その手前のはかりなきいのちそのものはアマダ仏としての寿命無量であります。このはかりなきいのちを対象化する前なのちであって、物質的な大自然も意識の働きもその寿命無量に於て成り立つ、そういう働き、それを寿命無量すなわちアマダ仏というのであります。

要するに今まで私をここ

まで生かしてください、そのお力こそ私を浄土へと運んでくださるお力であって、生死をこえた永遠の實在的な働きです。このはかりなきいのちのほかに真実の自己はないのですが、それを知らずに自分の個物的な身心だけを私自身として執着しているのが迷いの姿なのであります。

ただ、このアマダ仏は私を生かしてくださいとお働きですが、この働きは小さな私の知性とか「思い」で掴むことができせん。たとえ「アマダ仏によつて生かされている」と考えたり思ったりしても、それはなお「思い」や「考え」や「概念」であって、アマダ仏の實在的な生きたお働きに直接に触れたとはいえませ

ん。今、今とここに働きたもうアマダ仏を私（自我、知性的判断）では捉えることができないので、「アマダ仏に生かされている」といつても私と離れないアマダ仏に撰取されているという実際の感覚がありませんから感動が薄いし続きませ

ん。

そこでなんとかまことのアマダ仏にあいたい、掴みたい、目覚めたいと思うのですが、それは思うだけでいつまでも掴めず流転してしまふのです。いわゆる「どうにもならない」という壁にぶつかります。

ところが有り難いことに、南無阿弥陀仏を称えながらアマダ仏の仰せを聞いてみると、どうにもならない私に「南無阿弥陀仏、それここにいる、汝を助ける」とアマダ仏に喚びかけられていることにふつと気がつくのです。

南無阿弥陀仏のお念仏の声に「そんな助からぬどうにもならぬお前だから全て引き受ける」との大悲にであい、そこに「ああアマダ仏は私と共にいてくださる」ということがほのかですが知れるのです。ひとたび知られたら「私はアマダ様に抱かれています」という関係は消えないし、こわれません。こうして私をここまで生かしてくださいという大い

なるアマダ仏のいのちのお働きが私を浄土に至らしめたもうお力だと聞かされ知らされるのであります。

(了)

佐々木蓮磨師

『法味寸言』より

一、神仏の存在を否定しても、他力によつて生かされている事実は否定できぬ。

一、無力無能の人間が、今、現に生かされている事実が、未来往生の証明。

一、今、現に生きている事実（ありのまま）が一大不思議。このほかに仏なし。

〈遠方法話予定〉

〇十一月九日。福井別院。午前。法話・座談。

〇十一月十三日。名古屋市。高畑会館。午前。法話・座談。

〇十二月五日。午前十時より、六日午後まで。相生市。本願寺派法林寺。

〇十二月十五日。姫路市。西源寺。午前・午後

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

如来の興世にあいがたく

(和讃問答)

如来の興世にあいがたく

諸仏の経道ききがたし

菩薩の勝法きくことも

無量劫にもまれらなり

善知識にあうことも

おしうることもまたかたし

よくきくこともかたければ

信ずることもなおかたし

(浄土和讃)

現代語意識 (釈迦如来がこの世にお生まれになったときに生まれあわせ、説法を聞かせていただくことは難しい。また諸仏の説法を聞くことも難しい。そして諸仏が説かれる大乘の菩薩道という勝れた教えを聞くことも難しい。これらのことは、無量劫の時間を経ても難しいことである。

また私たちの救いである本願念仏の法を説いてくださる善き師におあいすることも難しいし、善き師に教えられてもこの愚かな私を導き教えて

くださることも容易ではない。

そして善知識が本願念仏の法を説いてくださっても、それを正確に聞かせていただくことも難しい。しかも聞かせていただいた本願念仏の思し召しを受受することはさらに難しいことである。しかるに釈迦・弥陀・諸仏善知識のお導きによつて本願念仏のお助けにあわせていただいた、何とありがたいことであろうか)

* * *

N 「この二つのご和讃のお心は何でしょうか」

D 「仏教にであつて仏の教えを聞くこと、そして仏の教えの中で本願念仏の教法を聞いて信じることははなはだ難しい。にもかかわらず、はからずも真実の仏法に遇うことができた。なんとありがたいことであろうか、というお心だと思います」

N 「これらのご和讃には典拠がありますか」

D 「ええ、仏説無量寿経に

仏、弥勒に語りたまわく、

如来の興世、値い難く見た

てまつり難し。諸仏の経道、

得難く聞き難し。菩薩の勝

法、諸波羅蜜、聞くことを

得ることまた難し。

善知識に遇い、法を聞き

て能く行ずること、これま

た難しとす。もしこの経を

聞きて信樂受持すること、

難きが中に難し、これに過

ぎて難きことなし。

とあります」

N 「釈尊の伝記の中で、シヤカ族の王族に釈尊がお生まれになつて、そのご誕生を祝うために来たアシダ仙人が幼いシーダールタ太子(釈尊)を見て、悲しみの余り涙にむせいだ、という話は有名ですね」

D 「そうですね。アシダは釈尊の父の王に(王よ、この子ももし家にましますば転輪王になつて四天下を治められるでしょうが、必ず出家して仏となられ、あまねく人々を恵

みたもうでありましょう。私は歳老いてこの仏の御のりを聞くことができぬ」と深い悲しみを語つたと伝えられていますね。仏がこの世にお出まじになつても、その説法にあらうことができないという悲しみ、それは人間の悲しみの中でもっとも深い悲しみだといわれています」

N 「アシダの話は(如来の興世にあいがたく)で、釈迦如来様がこの世にお出ましになつて法をお説きくださったのも、その時まで生きることができないから、仏法を聞くことができないという、その難しさですが、たとえ釈尊と同時代のインドに居て、釈尊が説法をして下さつていても、会えない人たちはたくさんいたと思います」

D 「そうですね。真実を聞きたい、本当の安らぎを得たいという宗教心が起こらないとたとえ釈尊が説法して下さつていても、あえて教えを聞くとはしないでしょうから」

N 「そうですね」

D 「真実にあいたいという求め心がやはり基本的に大事ですね。この心を菩提心とか求道心とかいわれますが、この心が起こり、そして仏の説法

にあう、この因縁(求道心という因と聞かせていただく仏法という縁)があつて初めて主體的に(法にあう)といえるので、こういう点からも仏法にあうということは難しいですね。このことは当然釈尊の時代のことだけでなく、現代のことでもあります」

N 「そうですね」

D 「またたとえ求道心が起こつても仏法を聞く縁に恵まれなければ仏法にあえないですね」

D 「仏法を聞く縁にもあい難いですね。釈尊が亡くなられて以後、釈尊の説法は、お弟子なり經典なりによつて伝えられて仏法を了解した多くの聖賢たち(諸仏)が仏法を説き続けてきました。それがここで(諸仏の経道)であり、その中に説かれているのが菩薩の正法(大乘の菩薩道)であります。その教えにあうことも難しいし、あつて聞いても我が身の救いにならないというところもあります。ですから本当に仏の教えにあつて救われるというところは(無量劫にもまれ)といわれるほど難しいといえましょう」

N 「諸仏から大乘の菩薩道の

仏法を聞いても救われないというところもあるのですね」

D 「ええ、菩薩道は大変尊いものです。それは人が求むべき普遍的な真理、人の真実あるべき姿、正しい浄らかな行いと罪、またどこに苦しみの原因があつて、どこに本当の安らぎがあるか、を教えて下さいませ。そういう意味で諸仏の説かれる菩薩道によつて人生の意味と方向の基本を知らされます。これはとても大事なことです。この教えにあうことは大切ですが、この教にあうことも難しいのですね」

N 「では次の和讃に〈善知識にあうことも おしうることもまたかたし〉と詠われている意味は？」

D 「これはただそういう菩薩道が説かれても、その道に自分が従つていけるのか、本当にそれが身につくのか、という点になります。これは非常に難しいことになります。そこでアマダ仏の本願の仏法を聞くようになるのですが、ここで本願を正確に詳しく説いてくださる善き師にあうことがまず難しいといわれるのです」

N 「私たちにとつて本当の善知識とは、弥陀の本願の救いを正確に詳しく説いて下さるお方のことですね」

D 「ええ、そうです。真宗を語るお方はたくさんおられますが、私にとつて真の善知識といえるお方にあうことは決してやさしいことではありません」

N 「本当の善知識にあうことが難しいのはなぜですか」

D 「まず自分自身が真に救われたいという心からなる求道心というものがなければ、そういう善知識を求められないのですから、法を求め心は前提です。この前提の上で弥陀の救いを正確に詳しく説いて下さる人にあうという事、これもやさしいとは言えません。難しいという方が当たつています。このお方が私の善知識だと思つても、かならずしも善知識とは言えない場合が当然あります」

N 「そうですか、では〈おしうることもまたかたし〉というのは」

D 「これはたとえまことの善知識にあつて、真宗の教えをお聞かせいただいても、そ

の善知識の説かれる弥陀の救いを正確に受け取ることは難しいですね。なぜなら仏法を聞く私たちはいろいろな先入見や橋慢心がありますから。そういう人に真宗の救いを正しく伝えることは難しい、という事です」

N 「では〈よくきくこともかたし〉とは」

D 「これは真宗の聞法者において一番身近な難しさです」

N 「まず〈よくきくこともかたい〉とは」

D 「よく聞くとは弥陀の本願の通りに聞く、ということですが、正確に聞く。ところが自分の今までの考えに固執しやすい私たちは素直に聞きません。聞いても自分流に解釈して受けとつてしまいます。自分の心を空にし、本願の思召しをまっすぐに仰ぐように聞く。アマダ仏のいわれることを素直な子が親の言うことをハイと聞くように聞く。これが〈よく聞く〉です。ことに近代人は自分の考えや世間の常識やさまざま知識で頭がいっぱいですから、弥陀の不可思議な本願のお助けを聞いても、聞いているようで本

当には聞いていないのです」

N 「では〈信ずることもなおかたし〉とは」

D 「これは聞法者がぶつかる一番の壁です。弥陀の本願は不可思議な救いです。これは知性的理解を先立てる人間にとつて信じることは難中の難といわれるのです。弥陀の本願は〈一声なりとも念仏申すばかりで助ける〉という丸だすけのお慈悲です。ですからこれを聞いて、〈ああこんな私のために〉と受け取ることは邪見を抱え橋慢心の強い凡夫にとつてはまことに難しいのです。余りにも単純であり、余りにも理屈に合わないから」

N 「それをここでは〈信じることもなおかたし〉といわれるのですね」

D 「ええそうです」

N 「では弥陀の本願を信じる

ことがそれほど難しいとすると人の救いは不可能になりませんか」

D 「いいえ、信じようとしても信じるのができないという壁にどうしてもぶつかりますが、この壁こそお助けが開かれる壁なのです」

N 「なぜですか」

D 「〈信じることができない、もう私には救いが無い〉という場に引き落とされます。実はその場こそ、お助けが来ている場なのです」

N 「どういうお助けですか」

D 「〈そんなどうにもならない、助からぬ汝をこそまるまる引き受ける〉という弥陀の本願が、初めてこんな私のための本願であつたかと思議にも知らされるのです。これは我が力というより、アマダ様のお力、大悲のお心が自然に届いて信心となつて私たちに成就してくださるからです」

N 「そうですか。このふたつのご和讃から仏法にあい、仏法を聞き、弥陀の本願にあい、弥陀の本願を信じることは本当に自分では不可能なこと、しかるに今アマダ仏の救いに計らずも遇うことができたのは不思議であり、有り難いことであり、如来善知識のご恩のおかげであるとの親鸞聖人の感恩のお心が裏に流れているのを感じます」

D 「そうですね」

(了)

